

過去テーマに関する取組状況について

ベビーゲート等の使用に関する安全確保（令和元（2019）年度テーマ）

1 提言後のこれまでの報告

本テーマの取組状況について、都は以下の報告をとりまとめて HP 上で公開している。

- 令和 3 年度報告（2022 年 3 月 30 日）
 - 事故状況（東京消防庁救急搬送事例等）
 - 業界団体の取組

2 事故状況

都は事故状況把握のため、東京消防庁救急搬送事例、医療機関ネットワーク¹受診事例を収集した。収集した事例を都で整理、分析した結果、2021 年から 2023 年までの間²で、ベビーゲート等³が関連する 5 歳以下の事故で救急搬送や受診に至った事例は 70 件⁴あった。うち中等症⁵の事例は 4 件あった。

収集した事例で「ベビーゲート等」に関連するものとしたものは、以下のとおりである。

- ・事例の中にベビーゲート等の記載がある。
- ・ベビーゲート等の設置が推測される記述がある。

(例) 階段に取り付けた柵が閉まっておらず

なお、ベビーゲート等の記載がなく、ベビーゲートの扉を閉め忘れたなどの理由で乳幼児が通過した後に転落等により危害が生じた場合は、事例として抽出できていない可能性がある。

表 1－1 2021 年から 2023 年までの事件事例件数

	救急搬送・受診件数
東京消防庁救急搬送事例	17 (2)
医療機関ネットワーク受診事例	53 (2)
合計	70 (4)

(注) カッコ内は中等症の件数

東京消防庁救急搬送事例の件数の推移は以下のとおりである。

表 1－2 事件事例件数の推移（東京消防庁救急搬送事例）

発生年	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
合計	5 (0)	8 (0)	10 (0)	14 (2)	7 (0)	12 (0)	18 (2)	6 (0)	4 (0)	7 (2)

(注) カッコ内は中等症の件数

¹ 消費者庁と独立行政法人国民生活センターは、2010 年から共同事業として、同種・類似の事故の再発を防止するため、全国 32 病院（2023 年 4 月時点）が参画し、消費生活において生命・身体に被害を生ずる事故に遭い医療機関を受診した患者から、消費者からの相談になりにくい不注意や誤った使い方も含めて事故の詳細情報等を収集する医療機関ネットワーク事業を実施している。今回都は、国民生活センターから提供を受けた事例を精査し、分類、集計した。

² 東京消防庁救急搬送事例は 2021 年 1 月～2023 年 12 月の事例である。医療機関ネットワーク受診事例は、2021 年 1 月～2023 年 12 月に伝送された事例を収集した。

³ 「ベビーゲート等」とは、生後 24 か月以内の乳幼児が室内、廊下、階段等へ移動することを防止するため、一般家庭の家屋に取り付けて使用するベビーゲート、ベビーフェンスといった商品（据え置き式の商品は協議会の対象外）

⁴ 搬送事例と受診事例は、一部重複する可能性がある。

⁵ 中等症とは、生命の危険はないが、入院を要するものである（傷病者重症度分類表による）。医療機関ネットワーク受診事例では、入院しなくても骨折や不可逆性のある傷病（切断や失明等）も含む。

年齢別の発生状況を以下に示す。0歳6か月から1歳までを中心に起こっているが、2歳以上の事故も生じている。

表 1－3 年齢別の発生状況

年齢	～5 か月	6 か月～	1 歳	2 歳	3 歳	4 歳	5 歳	合計
東京消防庁	0(0)	2(0)	11(1)	1(0)	1(0)	2(1)	0(0)	17(2)
医療機関ネットワーク	0(0)	20(0)	21(1)	3(0)	5(1)	2(0)	2(0)	53(2)
合計	0(0)	22(0)	32(2)	4(0)	6(1)	4(1)	2(0)	70(4)

(注) カッコ内は中等症の件数

事故発生要因別の発生状況を以下に示す。ベビーゲート等が直接関連した事故は 14 件あり、ベビーゲート等を通じた先で発生した事故は 47 件、状況が不明な事故は 9 件あった。

表 1－4 事故発生原因

事故の形態	ベビーゲート等に関連する原因	東京 消防庁	医療機関 ネットワーク	合計
ベビーゲート等が 直接関連した事故 事故（14 件）	ベビーゲート等が外れた※	0 (0)	1 (0)	1 (0)
	ベビーゲート等にぶつけた	2 (0)	0 (0)	2 (0)
	ベビーゲート等に挟んだ	7 (1)	1 (0)	8 (1)
	ベビーゲート等につまずいた	0 (0)	3 (0)	3 (0)
ベビーゲート等を 通過した先で発生 した事故（47 件）	閉め忘れ	0 (0)	36 (1)	36 (1)
	ロック解除	0 (0)	1 (0)	1 (0)
	ベビーゲート等を乗り越えた※	5 (0)	5 (1)	10 (1)
不明（9 件）		3 (1)	6 (0)	9 (1)
合計		17 (2)	53 (2)	70 (4)

(注) カッコ内は中等症の件数

※「ベビーゲート等が外れた」と「ベビーゲート等を乗り越えた」は、通過した先での事故か、直接関連した事故かの分類が難しいため、ここでは、本表のように分類している。

事故に関連するベビーゲート等の設置場所を事故原因別に以下に示す。設置場所別では不明を除くと階段に設置した場合の事故が他と比較して多く、全体の 36%を占めている。また、事故原因別に分けると、閉め忘れが全体の 51%を占めている。

表 1－5 ベビーゲート等の設置場所と事故原因

		階段			台所	居間	居室	ベランダ	玄関前	不明	合計	割合
		上	下	不明								
ベビーゲート等 が直接関連した 事故	外れた	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1%
	ぶつけた	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	3%
	挟んだ	0	0	0	2	0	0	0	0	6	8	11%
	つまづいた	1	0	1	0	0	0	0	0	1	3	4%
ベビーゲート等 を通過した先で 発生した事故	閉め忘れ	7	1	9	5	0	0	0	0	14	36	51%
	ロック解除	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1%
	乗り越えた	0	0	0	3	1	0	0	0	6	10	14%
不明		3	0	2	2	0	0	0	0	2	9	13%
合計		12	1	12	12	1	0	0	0	32	70	
		25										
割合		36%			17%	1%	0%	0%	0%	46%		

ベビーゲート等が関連する 5 歳以下の事故事例の一部を、以下に示す。

表 1－6 東京消防庁救急搬送事例

No.	事故（危害）の内容
1	台所横に設置していたベビーゲートに右膝が挟まり抜けなくなった。
2	ベビーゲートの隙間に右手首が挟まり抜けなくなった。
3	ベビーゲートを登って遊んでいたところ、前のめりに転落し、左側頭部をフローリングに強打した。
4	階段部分の転落防止用の柵にもたれ掛かっていたところ、誤って柵が開き、約 13 段転落した。

表 1-7 医療機関ネットワーク受診事例

No.	発生年	年齢	事故（危害）の内容	
1	2021 年	0 歳 9 か月	軽症	児は 2 階のリビングに兄と一緒にいた。母親が脱衣所で手を洗っていると、ドンドンという音と兄の泣き声が聞こえ駆けつけると、階段の一番下まで転落していた。母親がベビーゲートを閉め忘れていた。
2	2021 年	1 歳 2 か月	中等症	児と母親の 2 人で居間にいたが、母親は洗濯物を取りに部屋を離れた。母親が居間に戻った際、母親の薬（降圧剤）の包装シートが落ちていた。薬は、キッチン内の児の手が届く高さのラックに置いてあった。また、キッチンには侵入防止ゲートがあったが、施錠するのを忘れていた。薬は 3 錠残っているはずだったが、1 錠が床に落ちていたのみで 2 錠が見つからなかった。誤飲したと思い受診。誤飲 1 時間以内に胃洗浄実施したが明らかな薬剤は見られなかった。病院間搬送され、人工呼吸管理、小児集中治療室入院（7 日間入院）。
3	2021 年	1 歳 9 か月	軽症	リビングのゲート（高さ 80cm）を乗り越えようとして転落。母親がみた時にはうつぶせで泣いていた。前額部挫創 1.5cm、縫合処置を要した。
4	2022 年	1 歳 8 か月	軽症	児は 2 階、他大人は 1 階にいた。上から音が聞こえ、祖母が見に行くと、児が階段のゲートをがちゃがちゃして開けて階段上から転がるように落ちてきた。5 段ほどで祖母が児を受け止めた。すぐに啼泣、意識消失なし。前額部挫創 2.5cm、縫合処置を要した。
5	2022 年	1 歳 10 か月	軽症	ベビーゲートを強く揺すった際にゲートが外れてゲートの先が右足親指に当たり、約 6mm 切れた。
6	2022 年	1 歳 11 か月	軽症	自宅でベビーゲートにつまずき転倒。前にあった子供用の椅子（木製）の角にぶつけた。すぐに啼泣、嘔吐なし、左上まぶたに約 1cm の挫創、ほぼ止血。
7	2023 年	3 歳 2 か月	中等症	児がベビーゲートを乗り越えようとしていた。音がして母親が見ると、右半身を下にして泣いていた。右肘が腫れていた。右腕骨折。

3 業界団体の取組状況

一般財団法人製品安全協会からは、以下の回答があった。

(1) 商品の安全対策の強化

消費生活用製品安全法等の一部を改正する法律が公布され、令和 7 年 12 月 25 日に乳幼児用ベッド及び乳幼児用玩具が子供用特定製品として指定される予定である。このように乳幼児製品の安全性確保が進められている状況において、ベビーゲートの SG 基準についても国際整合を含めた見直し強化を検討している。

(2) 消費者の行動に結びつく注意喚起

一般消費者に向けた SG マークの認知度向上のため、SNS の活用を開始した。また、メールマガジンの発行頻度を増加させたり、Web ページを見やすいように変更したりするなど、広報活動に力を入れている。

4 都の取組

事故状況を注視しつつ、ウェブサイトや SNS で消費者へ注意喚起を継続している。また、子育て世代向けのイベントにおいて、事故防止啓発リーフレット「ベビーゲートを安全に使いましょう！」の配布を行っている。

さらに、令和元（2019）年度に協議会で行った消費者へのアンケート内容をもとに、今回消費者に対し、ベビーゲート等に関するインターネットアンケート調査を行ったので、その概要を示す。

<アンケート調査結果>

東京都又は近隣3県（埼玉県、千葉県、神奈川県）に在住し、子供と同居する20歳以上の方に、プレアンケートを実施した（有効回答：7,780件）。

プレアンケートで、住居内の危険場所（階段、台所等）への子供の立入防止のために使用している又は使用していた製品は「ベビーゲート又はベビーフェンス」と回答した5歳以下の子供と同居する方に、本調査アンケートを実施した（有効回答：1,071件）。

【所有状況について】（プレアンケート）

- ベビーゲート等を使用した経験がある子供を持つ家庭は、約6割であり、2019年度と比較して大きな差はなかった。最も使われていた種類は、家屋に取り付けるベビーゲートで回答者全体の39.9%であった。

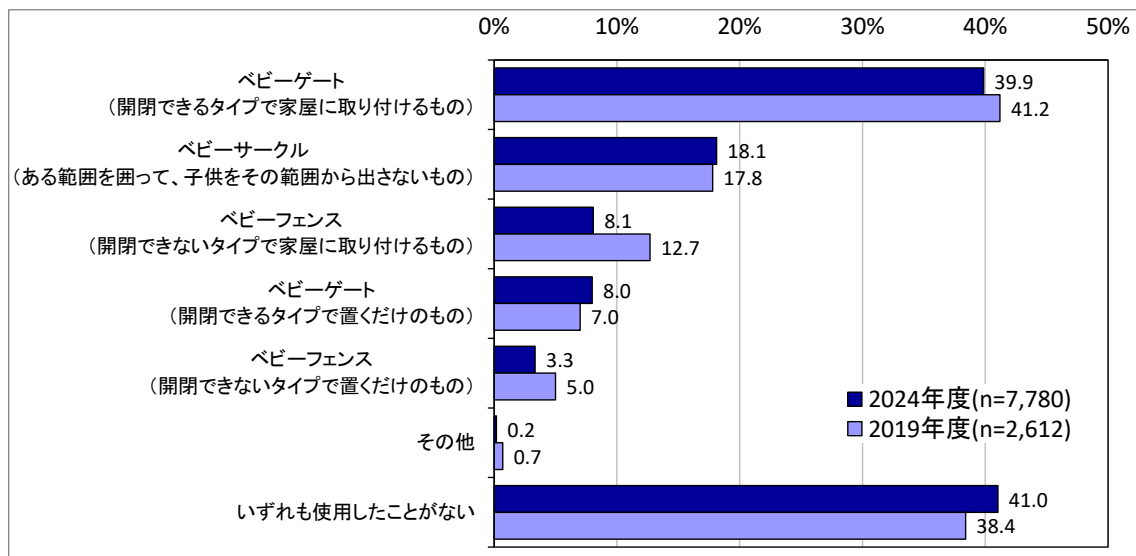


図1-1 ベビーゲート等の所有状況（複数回答）

【使用実態について】

- 設置場所は、「台所の出入り口」が60.1%、「階段の上」が29.5%、「階段の下」が21.9%と多かった。また、ベビーゲート等の設置にあたり最も危ないと考えている場所は、「台所」が最も多く51.4%であった。
- 取付方法は、「つっぱりタイプ」が75.4%と多く、「ねじどめタイプ」は6.7%であった。
- 形式は、「扉タイプ」が76.4%と最も多く、次いで「またぐタイプ」が16.8%であった。

【使用する際の安全について】

- 安全に役立っているかについては、92.7%が役立っていると回答した。
- 事故防止のために注意している点は、「取り付けを確実に行う」が61.9%と最も多く、次いで「扉を確実に閉める」が54.6%であった。

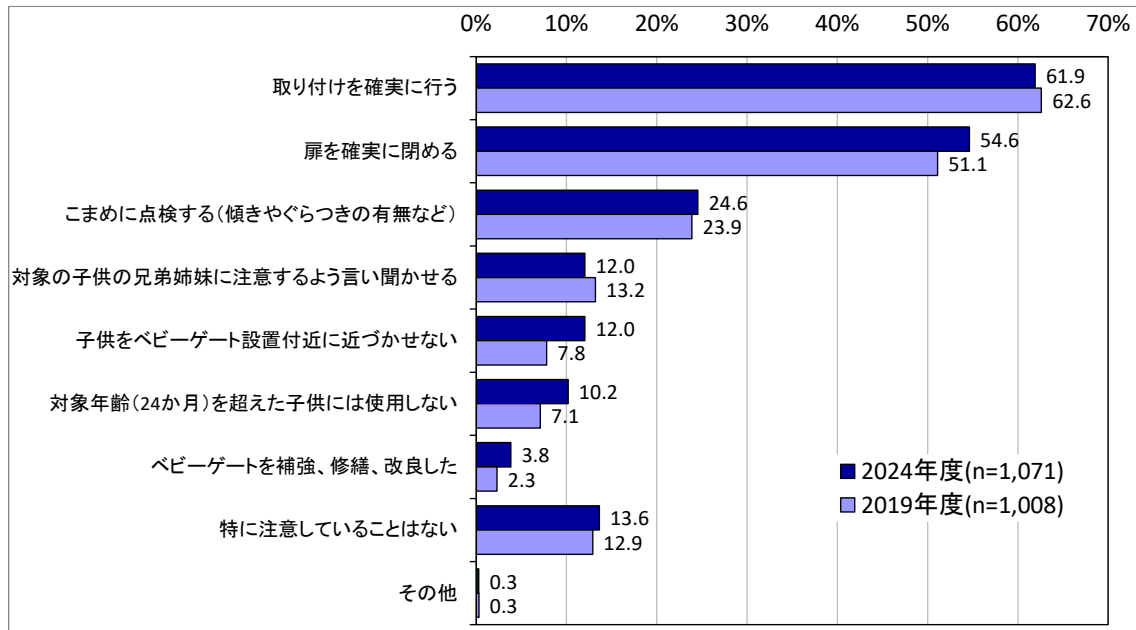


図 1 - 2 ベビーゲート等による事故の防止対策（複数回答）

【危害及びヒヤリ・ハット経験について】

- 「危害」又は「ヒヤリ・ハット」を経験した割合は、約 4 割であった。2019 年度と比較すると経験した割合は 8.9%減少した。
- ケガをした経験の割合は 5.0%であった。その内訳は、「ケガをして入院」が 0.9%、「ケガをして病院へ行った（入院を除く）」が 2.2%、「ケガをしたが病院へは行かなかった」が 1.9%であった。

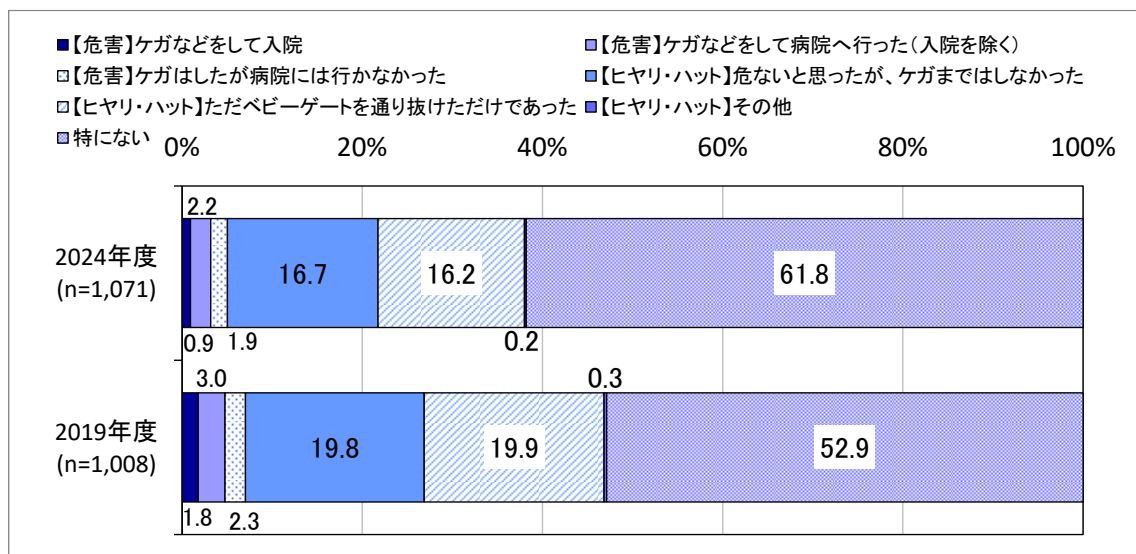


図 1 - 3 危害及びヒヤリ・ハット経験の有無（単一回答）

- 経験時の子供の年齢は、1歳以上3歳未満に集中しており、全体の約8割を占めた。
- 発生場所は、「台所」が53.8%、「階段の下」が14.9%、「階段の上」が13.4%と、8割以上の事例が「台所」と「階段」であった。
- 経験の内容としては、「ただベビーゲートを通っただけ」が26.2%で最も多く、次いで「ベビーゲートが外れてそのまま転倒」が18.8%、「ベビーゲートを乗り越えようとして転落」が17.6%、「ベビーゲートにぶつかる」が13.7%であった。2019年度と比較すると、「ただベビーゲートを通っただけ」が10.9%減少し、「ベビーゲートを乗り越えようとして転落」が6.9%、「ベビーゲートにぶつかる」が5.9%増加した。

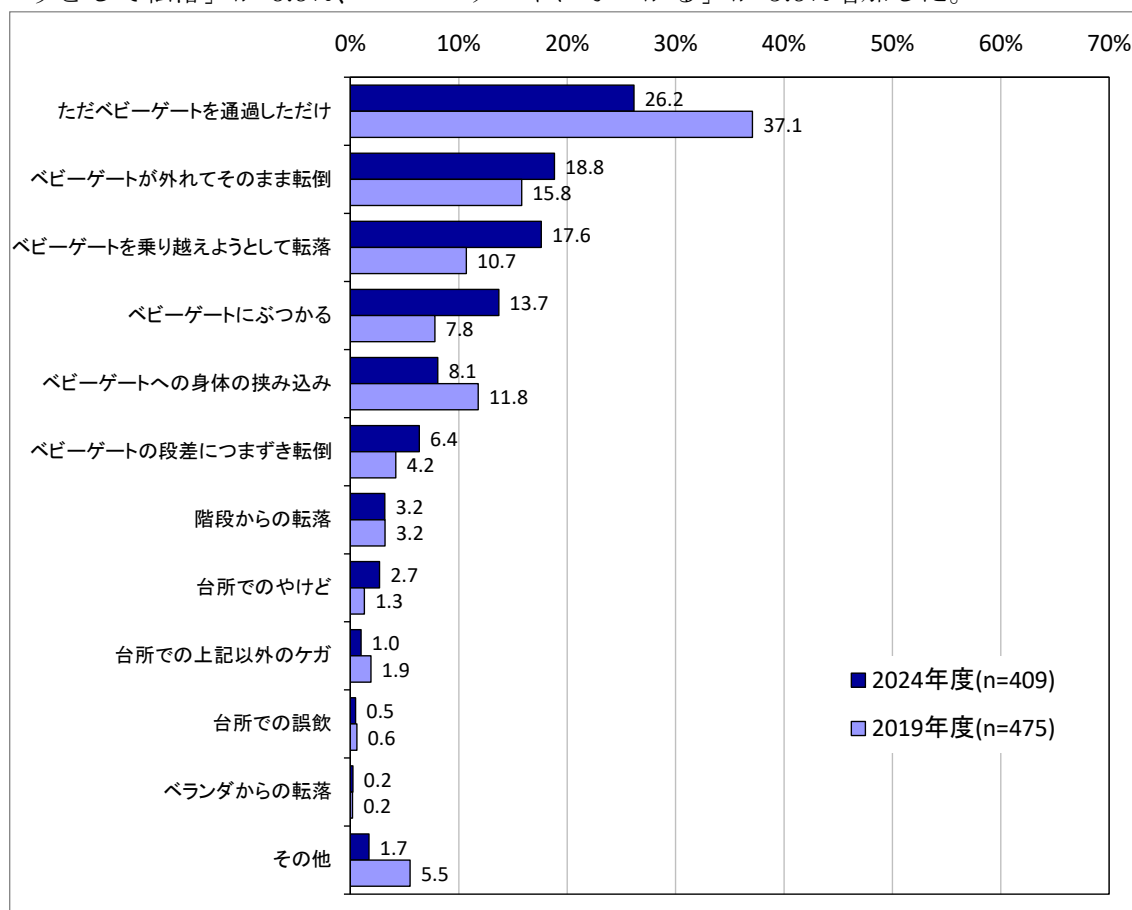


図1-4 危害及びヒヤリ・ハット経験の内容（単一回答）

- 原因としては、「簡単には外れないと思っていた」が27.1%と最も多く、次いで「保護者が子供から目を離してしまった」が24.7%、「保護者が閉め忘れてしまった」が19.8%、「取り付け方が悪かった」が16.9%であった。